

# 感情に関する認知の個人差

——感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連——

坂上 裕子<sup>1</sup>

本研究では、人格特性と認知との関連を検討するため、大学生169名を対象に、個人の感情特性と図版刺激における感情情報の解釈との関連について調べた。感情特性の指標として、5つの個別感情(喜び, 興味, 悲しみ, 怒り, 恐れ)の日常の経験頻度を尋ねた。また、感情解釈の実験を行う直前に、被験者の感情状態を測定した。感情解釈の課題としては、被験者に、人物の描かれた曖昧な図版を複数枚呈示し、各図版について、状況の解釈を求めた上で登場人物の感情状態を評定するよう求めた。両者の関連を調べたところ、喜びを除く全ての感情特性と、それぞれに対応した感情の解釈との間に、正の相関が認められた。すなわち、被験者は、自分が日頃多く経験する感情を図版の中にも読みとっていた。また、特定の感情(悲しみと怒り, 恐れと悲しみ, 恐れと怒り)については、感情特性と感情解釈との間に相互に関連が認められた。感情特性と感情解釈の相関は、感情状態の影響を取り除いてもなお認められたことより、感情特性は、感情状態とは独立に個別の感情に関する認知と関連を持っていることが示唆された。

キーワード：感情特性, 感情状態, 個別感情, 感情解釈, 大学生

## 問題と目的

感情は我々が環境と関わる際に、信号としての役割を果たしていると考えられている(Malatesta & Wilson, 1988)。我々は日々様々な感情を経験し、それらを通して自分の状態を知りとるべき行動を選択したり、それらの感情を表出することを通して、他者に自分の状態を伝えたりする。また、自分の外界、特に他者にどのような感情を知覚、解釈するかによって、外界との関わり方を判断したりする。したがって、感情に関する認知は、我々が社会生活を送る上で、適応に大きく関わってくる。本研究では、感情に関する認知にどのような個人差があるのかを、感情に関連した人格特性に着目し検討する。すなわち、個人の有している感情特性(あるいは感情傾向)は、感情に関連した情報の解釈にどのような影響を与えているのだろうか<sup>2</sup>。

## 感情と認知の関連

感情が人間の様々な認知処理に影響を与える、ということが指摘されるようになって久しい。感情の認知に対する影響は一般に、気分一致効果や気分状態依存効果などとして知られ、数々の研究が積み重ねられてきた。今や感情が様々な認知過程に影響を与えることに異論を唱える者はないが、一方では、気分一致効果や気分状態依存効果は、必ずしも頑健でないことも知

られ、これについては、様々な原因が考えられている(詳しくは谷口(1991, 1995), 高橋(1996)などを参照)。

例えば、その1つとして、研究アプローチによる結果の頑健性の違いが挙げられる。認知に対する感情の影響を調べる方法としては、主に2つのアプローチがとられてきた。1つは、気分誘導法と呼ばれる方法で、健常者を対象に実験的に気分を誘導し、誘導された気分状態における認知の特性を明らかにしようというも

<sup>2</sup> 感情に関する用語(感情, 情動, 気分, 情動特性)と、それらの本論での用い方について整理しておく。感情(affect)とは、一般に、情動(emotion)や気分(mood)、生理的欲求などを内包した、広義の概念であるとされている。情動と気分の違いについては、様々な見解があるが、複数の論者が共通して指摘する基準としては、持続時間(例えばEkman, 1994; Watson & Clark, 1994)や先行因(例えばEkman, 1994; Frijda, 1994)を挙げることができる。一般に、情動は先行因および対象が明確で持続時間の短い反応、気分は先行因および対象が明確でなく、比較的持続時間の長い反応、と捉えられることが多いだろう。

情動は、状態としても特性としても機能する(Izard, 1996)。上記の情動の定義は、状態としての情動に関するものである。一方、情動特性という場合には一般に、特定の情動経験の頻度、あるいは特定の情動反応の閾値の低さ、という観点から捉えられる、時間的に安定かつ一貫した個人の傾向を指す(例えばLazarus, 1994; Watson & Clark, 1994; Frijda, 1994)。両者の例としてもっともよく知られているものとしては、状態不安と特性不安の区別を挙げることができるだろう。

このように、実際には各語の指示内容にはそれぞれ違いがあるのだが、複数の先行研究間で用語の用い方が統一的不是なため、ここではもっとも広義である感情(affect)という用語を主に使い、情動特性は感情特性、気分は感情状態と記すことにする。

<sup>1</sup> 東京大学教育学研究科

のである。もう1つは、個人差に基づく研究方法である。これは、臨床群あるいは亜臨床群を対象として、実験的な気分の誘導は行わずに、被験者の自然な気分状態を利用することで、各気分状態の認知の特徴を調べる、というものである。この種の研究としては、鬱病や不安神経症など感情障害をもった被験者とそうでない被験者とで、認知的なパフォーマンスがどのように異なるのかを比較したことが多い。谷口(1991, 1995)は、先行研究のレビューの中で、この2つのアプローチの研究結果を比較した場合、気分誘導法による研究よりも、個人差アプローチによる研究の方が、比較的明瞭な結果を生んでいるようだ、と述べている。これは何を示唆しているのだろうか。谷口(1995)は、個人差アプローチで得られている結果について、「厳密に言えば感情が認知に影響するというよりも、人格特性の違いによる認知的処理の違いと考えられる」(谷口, 1995, p.1)と考察している。谷口の指摘を別の観点から言い換えれば、個人差研究の結果は、気分あるいは感情状態(affective state)、すなわち個人の一過的な感情反応と認知との関連よりも、人格特性としての感情特性(affective trait)、すなわち個人のもつ、時間的に安定した感情傾向と認知との関連の方が検出しやすい、という可能性を示唆しているとも考えられる。

#### 感情状態、感情特性が認知に与える影響

感情と認知の関連を調べた多くの研究では、認知に影響を与える要因として、主に感情状態に焦点が当てられ、感情特性は相対的に軽視されてきた。しかしながら、感情の特性的側面が認知に影響を与えるという観点が、今までの理論に含まれていないわけではない。

現在、気分一致効果を説明する有力な説明としては、スキーマ理論(Beck, 1976)とネットワークモデル(Bower, 1981)があるが、前者は感情の特性的側面に強調点をおいたモデルだと言える。スキーマ理論では、個人の有している高次の長期的な認知的スキーマが、情報の符号化、解釈、検索をガイドすると考える。例えば抑鬱の人は、「抑鬱スキーマ」を持っており、このスキーマは、喪失や失敗に関する、ネガティブな色調を帯びた情報の処理を優先して行う。このスキーマは、それに対応した感情が一定水準以上に喚起された時に活性化され、情報をスキーマに整合するように、つまりスキーマの感情価に一致するように、情報処理にバイアスを生じさせるという。このように、Beckのスキーマ理論は、状態としての感情の働きを考慮に入れつつも、感情の特性的側面に強調点をおいたものと言える。

一方のネットワークモデルでは、現在の感情状態が、

その感情状態に関連するような長期記憶あるいは概念を活性化することで、気分一致効果が生じると考える。つまり、ネットワークモデルは状態としての感情の役割を強調したものである。しかしこのモデルでも、感情特性を仮定し、気分一致効果の個人差を説明することは可能である。すなわち、ある特定の感情への傾性がある人は、様々な状況でその感情状態を経験することが多い。その結果、その感情に関連した長期記憶の連合は強くかつ豊富になる。それが、気分一致効果に安定した個人差をもたらすと考えられる。

感情状態と感情特性の双方を考慮に入れて、認知に対する感情の影響を調べた研究は、主に不安神経症や抑鬱の人を対象とした個人差研究の中で行われてきた。その中には、感情特性が認知的処理に単独で影響を与えていることを支持する結果(Mogg, Mathes & Weinman, 1989)がある一方で、感情状態のみが効いているという結果(Mathews & MacLeod, 1985; Watts, McKenna, Sharrock & Trezise, 1986)や、両者の交互作用があるといった結果(Mathews & MacLeod, 1986; MacLeod & Mathews, 1988; Broadbent & Broadbent, 1988)もあり、一貫した結論は得られていないようである。

このように感情特性と認知との関連を探るいくつかの試みはなされてきたが、これまでの個人差研究は、次の点において限定的であると言えるのではないかと。

1つは、主に臨床群を対象としており、非臨床群を対象に個人差を扱った研究はほとんどないという点である。例えば、MacLeod(1990)は、臨床群を対象とした場合、感情状態と感情特性の相関が非常に高い(例えば特性不安と状態不安の相関は.70以上、Mathews & MacLeod, 1986; Mogg, Mathews & Weinman, 1989)ため、両者の影響を分離して特定することが難しいことを指摘している。もう1つは、特定の感情特性一ほとんどの場合は不安傾向や抑鬱傾向、にしか焦点を当てていない、という点である。不安傾向や抑鬱傾向は確かに臨床的にみて重要な感情特性ではあるが、それだけで人の感情特性の様々な個人差を網羅できるわけではない。

そこで本研究では、主に臨床群を対象に得られてきたこれまでの理論的、実証的知見をさらに広げて、非臨床群を対象に、複数の感情特性に焦点を当て、感情に関する情報処理にどのような個人差があるのかを検討したい。実際の日常生活を振り返ると、我々は様々な種類の感情を経験している。そして、経験的に、抑鬱傾向や不安傾向以外にも様々な感情特性(例えば、怒りっぽい人、朗らかな人、傲慢な人などというように)があることを知っている。様々な感情特性を考慮に入れば、

特定の感情障害を持つ人とそうでない人の違いだけでなく、様々な人の感情に関する認知の多様性を説明できるのではないだろうか。

### 人格特性としての感情特性とその役割

ここでは、Malatesta-Magai の提唱する「感情バイアス」(Malatesta & Wilson, 1988 ; Malatesta, 1990 ; Magai & McFadden, 1995 ; Magai, 1996) という考えに依拠しながら、上記の問題を検討していきたい。Magai は、主に Tomkins (1962, 1963) や Izard (1977) の個別感情理論に基づき、感情を中心軸に据えた、パーソナリティの発達に関する理論を呈示している。

Magai によれば、喜び、怒り、恐れ、悲しみなどの個別感情は、それぞれが環境への適応を高めるという適応的な目的を有している。したがって、特定の感情が優位化することなく、全ての個別感情をバランスよく経験できることが、適応上望ましいと言える。しかし多くの場合、我々は発達過程において、ある特定の感情に対する偏向を形成するという。すなわち、発達の初期に他者（特に主要な養育者）とのやりとりの中で、ある種の事象が反復的に経験され、それに伴いある特定の感情の喚起のパターンが繰り返されると、それが結晶化し、特定の感情状態がその人の経験の中で中心的なものになる、というのである。Magai は、このような個人に特有の特定のムード状態への傾性、あるいは感情経験の偏りを、感情傾向(affect bias)と呼び、これがパーソナリティの組織化において中心的な役割を果たすと考えている。そして、この感情傾向が、個人に特定の感情状態を生起させやすくし、情報の知覚、解釈や精緻化、学習や再生などの様々な認知過程に影響を与えるという。つまり、感情傾向は、外界の情報に対するフィルターのような役割を果たし、外界からの情報を選択的に通過させるというのである。この感情傾向が非常に極端な場合には、ある種の精神病理に結びつく（例えば悲しみが過剰な場合には抑鬱、恐れが過剰な場合には不安障害）が、それほど極端でなく、ある程度の柔軟性を有している場合には、個人の性格的な特徴になるという。

感情特性を人格特性として捉えるという Magai の主張は、実証的にも支持されてきている。例えば、Izard, Libero, Putnam & Haynes (1993) は、個別感情の経験頻度の時間的安定性とアイゼンクの人格特性(Eysenck & Eysenck, 1985) の関連について調べている。その結果、一部の感情を除いた個別感情（喜び、興味、驚き、悲しみ、怒り、恐れ）において、3年間にわたる時間的安定性が認められたという。また、肯定的感情はアイ

ゼンクのスケールの外向性を予測し、否定的感情は神経症傾向を予測したと報告している。こうした結果を踏まえ、Magai (1996) は、いわゆる Big Five のうちの少なくとも4つの次元については、データに沿った形で感情的特性次元に置き換えることができる、と述べている。また、これまでの人格心理学および臨床心理学の流れからは、少なくとも喜び、興味、悲しみ、怒り、恐れ の5つの感情に関連した感情特性を仮定できるのではないかと結論づけている。

しかしながら、感情特性が情報処理に影響を及ぼすという Magai の主張については、それを支持するいくつかの傍証はあるが、彼女の指摘する全ての感情傾向についてこれを包括的、直接的に検討した研究はない。

また、Magai は、感情特性は個人に特定の感情状態を生起させやすくし、情報の処理に影響を与える、と述べているが、そのプロセスについては必ずしも明確に述べていない。この点については、2つの可能性が考えられる。1つは、感情特性が情報処理に直接的に影響を与えるという可能性、もう1つは気分一致効果などで知られてきたように、感情特性はあくまでも感情状態を媒介として、間接的に情報処理に影響する、という可能性である。前者の場合、感情特性は、感情状態と情報処理の両方の直接的な原因であるとみなされる。したがってこの場合には、感情状態の影響を取り除いても、それぞれの感情特性に一致した方向で、情報処理に偏りが見られるはずである。一方、後者の場合には、情報処理に直接影響を与えるのは感情状態であり、感情特性はあくまでその感情状態を導く一要因に過ぎない、ということになる。この場合には、見かけ上、感情特性と情報処理との間に関連が見られたとしても、感情状態の影響を取り除いてしまうと、両者の間には関連は見られない、ということになる。

**本研究の目的** 本研究ではこの2つのうちの前者の可能性、つまり、感情特性が感情状態とは独立に情報処理に関連する、という可能性について、Magai の仮定する、喜び、興味、悲しみ、怒り、恐れ の5つの感情特性に焦点を当て、検討したい。情報処理の課題としては、感情解釈課題を用いる。これは、被験者に複数の解釈が可能な曖昧図版を呈示し、登場人物の感情の解釈を求める、という課題である。図版の解釈は、ある程度図版の性質によって規定されるが、図版のどの部分に注意を向けるか、また、そこからどのようなことを想起するかによって、解釈に個人差が生じるものと考えられる。個人の感情特性は、この注意や想起といった過程において、情報処理に影響を与えると思

われる。仮説としては、被験者は感情状態に大きく依存することなく、自分の感情特性に一致した方向で図版を解釈すると考えられる。例えば、怒りという感情特性が顕著な人は、図版の解釈においても怒りを多く読みとる、といったような傾向があると考えられる。

また、本研究では、感情状態と感情解釈との関連を調べるために、被験者の自然な感情状態を利用する。一般に、健常群を対象に感情状態の影響を調べる場合には、気分誘導法が用いられることが多い。しかし、被験者の自然な感情状態を用いることには、気分誘導法の問題点(誘導されている気分の性質や強度が異なる、あるいはどのような気分が誘導されているのかが明確ではない)を補えるという利点があり(谷口, 1991, 1995)、今回のように質の異なる複数の感情に焦点を当てる場合には、こちらの方法がより適していると考えられる。

## 方 法

### 予備調査 I 刺激図版の選定

**被験者** 大学生20名。

**手続き** 自作の図版8枚を用意した。図版には、表情のない(目、鼻、口など、顔の部位が描かれていない)、1人あるいは複数の人物が白黒の線画で描かれている。各図版には見方によっては葛藤的な感情が読みとれるような刺激を入れてある。被験者に、これらの図版を呈示し、各図版について絵の状況および登場人物の感情状態について、自由記述を求めた。その結果、8図版中、6図版については、1.状況の解釈が、大まかに分類しても少なくとも4種類以上に分かれ、2.被験者の8割以上が絵の登場人物に何らかの感情状態を読みとり、3.感情状態の解釈が、喜び、興味、悲しみ、怒り、恐れの中の、少なくとも3種類以上に分かれた。このことより、これらの6図版については多様な状況解釈や感情解釈を導きうる多義的な図版であると判断し、本調査で用いることにした。残りの2図版については状況解釈や感情状態の記述が限られていたため、刺激図版としては不適切と判断した。

また、登場人物の感情状態としては、上記の5感情の他に、驚き、飽き・退屈、安堵などへの言及が見られた。このうち、驚きは基本感情の1つに含められることが多いため、これを考慮して、評定尺度の項目の中に含めることとした。

### 予備調査 II 評定尺度の作成

**手続き** 刺激図版の登場人物の感情状態を評定する尺度を作成するため、予備調査を行った。被験者(大学生40名)に、喜び、興味、驚き、悲しみ、怒り、恐れ

各感情を表わすと思う形容詞を自由に記述するよう求めた。その回答の中から、尺度に用いる形容詞を各感情につき2語選出し、6感情12語から成る評定尺度を作成した。

次に、別の被験者(大学生63名)を対象に、予備調査 I で選定した図版について、上記の評定尺度を用いて評定をしてもらった(手続きは、本調査の手続き②感情解釈課題に準じた)。その結果、興味、怒り、恐れについては、尺度に用いた2つの形容詞の評定値の相関がそれほど高くなかった(5~.7)ため、尺度としての信頼性が十分とは言えないことが明らかになった。そこで、これらの感情については新たに一語を加え、評定尺度として用いることとした。

### 本調査

**被験者** 大学生187名。このうち、回答に不備があるものを除き、有効な回答が得られたのは169名(男性81名、女性88名、レンジ18-26歳、平均年齢19.77歳、標準偏差1.23)であった。

#### 手続き

①感情特性の測定 Izard et al. (1993) の個別情動尺度4版 (DESIV : Discrete Emotion Scale IV) を翻訳し使用した。これは、喜び、興味、驚き、悲しみ、怒り、恐れをはじめとする12の感情について、個々の感情を普段どのくらいの頻度で経験するかを5件法で尋ねる、計36項目(各感情につき、3項目)から成る質問紙である。今回はこのうちの一部(喜び、興味、悲しみ、怒り、恐れ、嫌悪、軽蔑に関する項目、計21項目)を使用した<sup>3</sup>。軽蔑と嫌悪に関する項目を含めたのは、これらを怒り特性に関連した感情として、補足的に使用するためである。これは、怒り、軽蔑、嫌悪が、敵意の三要素(イザード, 1996)と呼ばれ、しばしば同時に生じやすい感情であるということ、また、社会化を受けた大人の場合には、怒りよりも軽蔑や嫌悪といった、より制限された形で敵意が現れやすいという指摘を鑑みてのことである。

なお、感情特性の時間的安定性を確かめるために、一部の被験者(86名)には、2度にわたり DESIV への回答を求めた。1度めは、感情解釈課題を行う3週間前に、2度めは、感情解釈課題の実施時に同時に行った。

<sup>3</sup> 項目例を以下に示す。何かについて嬉しいと感じる(喜び)、自分がしていることや自分の目に映るものが面白いと感じる(興味)、悲しくて、ゆううつで、落ち込んだ気持ちになる(悲しみ)、誰かに対してむしように腹が立つ(怒り)、何かよくないことが起こるのではないかと思ひ、恐ろしくて落ち着かない気持ちになる(恐れ)。

②感情解釈課題 予備調査で選定した6図版を呈示し、各図版ごとに、描かれた状況の解釈(自由記述)と、登場人物の感情状態の評定を求めた。図版は次の通りである。図版1—テレビと電話の前で足を組み床に座る男性、図版2—テーブルをはさみ座る男女。男性は女性の方向を指さすポーズをとり、女性は男性とは反対の方向に顔を向けている。図版3—女性とその後ろを走る男性、図版4—近接して歩く2人の女性と、そちらの方向に腕を上げている1人の女性、図版5—木にもたれ、顔を下方に向けている男性、図版6—片手に四角いものを持ち、台に片肘をつけている女性。

評定用紙には、喜び、驚き、悲しみについては各2つ、興味、怒り、恐れ、については各3つの形容詞が記されている。被験者には、各形容詞が登場人物の感情状態にどの程度近いと思うかを5段階で評定するよう求めた。複数の人物が描かれた図版については、どの人物の感情解釈を行うかの選択は被験者にまかせた。また、図版の呈示順による影響が出る可能性を想定し、呈示順を変えた4種の冊子を用意した。

③実験時の感情状態(気分)の測定 感情解釈課題で用いたものと同じ評定尺度を呈示し、各形容詞の感情状態を被験者がどの程度はつきり感じているかを、5件法で評定するよう求めた。

全体の実施順序としては、③、②、①の順とし、3つを1つの冊子にまとめて配布した。

## 結 果

### 感情特性得点の算出

DESIVの項目のうち、各感情に対応した3項目の評定値の合計を以て、各感情特性の得点とした。各感情の3項目間の $\alpha$ 係数は.70以上であり、それぞれに高い内的整合性があることが確認された。各感情特性の平均値および標準偏差をTABLE 1に示す。この表より、平均的には喜び、興味などの肯定的感情特性の方が、他の感情特性に比して高得点であることが伺える。性差については、喜びと悲しみの特性で、女性の方が高い得点を示していた(喜び 男性  $M=9.99$ ,  $SD=2.62$ , 女

TABLE 1 感情特性、感情解釈、感情状態の平均値および標準偏差

	喜び	興味	驚き	悲しみ	怒り	恐れ
感情特性	10.53(2.58)	10.75(2.77)	—	9.18(3.11)	8.49(2.74)	6.89(3.04)
感情解釈	13.48(3.78)	14.37(3.93)	15.04(3.95)	17.00(4.50)	13.89(4.16)	16.14(4.46)
感情状態	2.65(1.04)	2.28(.85)	1.84(.95)	1.97(1.07)	2.02(1.05)	1.85(.82)

とりうる得点の範囲は、感情特性が3~15点、感情解釈が6~30点、感情状態が1~5点。

性  $M=11.01$ ,  $SD=2.46$ ,  $F(1,168)=7.01$ ,  $p<.01$ ; 悲しみ 男性  $M=8.69$ ,  $SD=3.21$ , 女性  $M=9.76$ ,  $SD=2.83$ ,  $F(1,168)=5.31$ ,  $p<.05$ 。

感情特性の時間的安定性 DESIVを2度とも受けた被験者の、1度めの回答と2度めの回答の間の相関を算出した。ピアソンの相関係数の値は、喜び、興味、悲しみ、怒り、恐れ順にそれぞれ、.75、.67、.81、.78、.75であった。興味特性の得点の相関係数が若干低いとはいえ、その他の感情の尺度得点には比較的高い時間的安定性が認められた。これより、DESIVで測られたものは、個人の感情特性とみなしてよいと考えられる。

### 感情解釈得点の算出

まず、各図版ごとに各感情を表わす形容詞の評定値の加算平均を算出した。次に、全図版を通した、各感情の平均評定値の合計得点を以て、各感情の解釈得点とした。全図版を通した感情解釈得点の平均値および標準偏差をTABLE 1に示す。この表より、全般的な傾向として、被験者は全図版を通して図版に肯定的感情よりも否定的感情を多く読みとっていたことが伺える。性差に関しては、興味解釈得点のみ、男性の方が有意に高かった( $F(1,168)=6.34$ ,  $p<.01$ )。また、個別の図版ごとの各感情解釈の平均評定値を比較したところ、各図版に次の様な特徴があることが伺えた。各感情解釈の平均評定値が相対的に高かったもの(2.7以上)から判断すると、図版1は喜びや興味、図版2は怒り、図版3は驚きや恐れ、図版4は恐れや悲しみ、図版5は悲しみや恐れ、図版6は悲しみといった感情の解釈を導きやすい図版であったようだ。

なお、感情解釈の評定に用いた尺度については、各感情を表わす2つの形容詞の相関(あるいは3つの形容詞間の $\alpha$ 係数)はいずれも.79以上であり、内的整合性の高い尺度であることが確認された。

### 実験時の感情状態得点の算出

各感情状態を表わす形容詞の評定値の加算平均を以て、実験時の感情状態の得点とした。平均値および標準偏差をTABLE 1に示す。この表から、実験時に被験者はそれほど強い感情状態は経験していなかったこと、また被験者が経験していた感情状態の質は全般的に肯定的であったことが伺える。性差に関しては、女性の方が悲しみ( $F(1,168)=4.35$ ,  $p<.05$ )と恐れ( $F(1,168)=4.51$ ,  $p<.05$ )を、相対的に強く感じていたようだった。

### 感情特性、感情解釈、実験時の感情状態の関連

各々の関連をみるため、各変数間の相関を算出した。分析は、①全体的傾向、②男女別の傾向、③図版別の傾向、の3通りを試みた。なお、結果では主に.20以上

の相関が見られたもののみ、紹介する。

**感情特性と感情解釈の単純相関** ①全体的傾向 (TABLE 2) 全ての感情特性について、それぞれに対応した感情の解釈との間に弱い相関が認められた。また、否定的感情 (悲しみ, 怒り, 恐れ) については、相互の感情間で特性と解釈との間にそれぞれ弱い相関が認められた。②男女別傾向 男女ともに、全体的傾向におおかたは似たパターンの相関が得られた。ただし、女性でのみ、特定の感情特性と解釈との間 (悲しみ・怒りの特性と喜びの解釈, 喜び・興味の特性と悲しみの解釈) に負の相関が見られた。③図版別傾向 .20以上の相関があったもののみ、表にまとめる (TABLE 4)。図版3を除く全ての図版で、感情特性と解釈との間にいくつかの弱い相関が認められた。ただし、どの特性とどの解釈の間に関連があるかは、図版により異なった。

**実験時の感情状態と感情解釈との単純相関** ①全体的傾向 (TABLE 3) 悲しみを除く全ての感情について、感情状態とそれぞれに対応した感情の解釈との間に弱い相関があった。その他にもいくつかの関連が認められたが、特に興味の状態は、悲しみを除く全ての感情の解釈と関連を有していた。②男女別傾向 相関のあったものは、男女でやや異なった。特に、男性では、肯定的な感情状態と興味・驚きの解釈とが関連していたのに対し、女性では肯定的感情状態と喜び・興味の解釈とが関連していた。③図版別傾向 .20以上の相関

があったもののみ、表にまとめる (TABLE 4)。全ての図版で感情状態と解釈との間にいくつかの弱い相関が認められたが、どの感情状態とどの感情解釈が関連しているかは、図版により異なった。

**感情特性と感情解釈の偏相関** 感情特性と実験時の感情状態の相関を算出したところ、各感情特性とそれぞれに対応した感情状態との間には、低いもので.67, 高いもので.81という、高い値が得られた。このため、感情特性、感情状態それぞれ単独での、感情解釈との関連を調べるため、偏相関を求めた。①全体的傾向 (TABLE 2) 感情特性と感情解釈の間には、感情状態の影響を取り除いた後でも、複数の有意な相関が見られた。興味, 悲しみ, 恐れ の3つの感情特性については、それぞれ対応した感情の解釈との間に弱い相関が見られた。怒りに関しては、怒り特性と怒り解釈との間にはあまり相関はなかったものの、DESIVで測られた嫌悪, 軽蔑との間には弱い相関があった (嫌悪と怒り解釈  $r=.30, p<.01$ , 軽蔑と怒り解釈  $r=.20, p<.05$ )。その他には、興味特性と喜び解釈の間に、また、悲しみと怒り, 悲しみと恐れ, 怒りと恐れについては、それぞれ特性と解釈の間に相互に関連が認められた。②男女別傾向 男女のいずれでも全体的傾向に似たパターンの相関が得られたが、女性では、男性よりも全般的に、特性と解釈との相関は低かった。③図版別傾向 (TABLE 4) 図版3を除く全ての図版で、何らかの特性と解釈との間

TABLE 2 感情特性と感情解釈の相関

	感情解釈					
	喜び	興味	驚き	悲しみ	怒り	恐れ
感情特性						
喜び	.22**/.11	.15 / .05	.06 / .01	-.06 / -.04	-.04 / -.05	.04 / -.05
興味	.29**/.22**	.25**/.21**	.12 / .09	-.13 / -.11	-.08 / -.10	-.05 / -.08
悲しみ	-.17 / -.15	-.03 / -.05	.17 / -.05	.25**/.27**	.22**/.21**	.32**/.34**
怒り	-.22**/-.15	-.08 / -.08	.13 / .15	.26**/.20*	.24**/.18*	.35**/.33**
恐れ	-.15 / -.18*	.09 / -.01	.26**/.23**	.32**/.29**	.33**/.27**	.43**/.37**

単純相関/偏相関, \*\* $p<.01$  \* $p<.05$  (太字は相関が.20以上のもの)

TABLE 3 感情状態と感情解釈の相関

	感情解釈					
	喜び	興味	驚き	悲しみ	怒り	恐れ
感情特性						
喜び	.25**/.15	.24**/.17	.13 / .10	.01 / .04	.05 / .05	.10 / .13
興味	.26**/.21**	.42**/.37**	.23**/.20*	.14 / .15	.20* / .18*	.21**/.17
驚き	.18* / .17	.29**/.24**	.21**/.15	.07 / .02	.14 / .07	.14 / .07
悲しみ	-.06 / .05	.07 / .14	.02 / -.04	.12 / .02	.07 / -.03	.03 / -.07
怒り	-.10 / .03	.08 / .17	.06 / .02	.27**/.18*	.21**/.13	.18 / .08
恐れ	.05 / .14	.22**/.21**	.11 / -.02	.10 / -.07	.18* / .03	.24**/.06

単純相関/偏相関, \*\* $p<.01$  \* $p<.05$  (太字は相関が.20以上のもの)

TABLE 4 図版別にみた、感情特性、感情状態と感情解釈の関連

図版	.20以上の相関があった感情特性 - 感情解釈	.20以上の相関があった感情状態 - 感情解釈
1	悲しみ - 悲しみ 怒り 恐れ 怒り - 怒り 恐れ - 驚き 怒り 恐れ	興味 - 驚き 怒り - 悲しみ 怒り 悲しみ - 悲しみ
2	興味 - 興味 恐れ - 恐れ	興味 - 悲しみ 恐れ
3		興味 - 喜び 興味 驚き - 喜び 興味 怒り - 悲しみ
4	興味 - 喜び 怒り - 恐れ 恐れ - 怒り 恐れ 悲しみ - 恐れ (偏相関のみ)	喜び - 興味 驚き 興味 - 興味
5	興味 - 喜び 恐れ - 悲しみ (偏相関のみ)	興味 - 興味 驚き 怒り 驚き - 興味
6	悲しみ - 怒り 恐れ 怒り - 怒り 恐れ 恐れ - 悲しみ 怒り 恐れ	興味 - 興味 驚き - 恐れ 恐れ - 恐れ

細字は単純相関のみ.20以上だったもの、太字は単純相関・偏相関ともに.20以上だったもの



の影響を取り除いた時には、主に特定の感情状態(興味)に関してしか確認されなかった。しかし、この結果だけから、感情解釈に対する感情状態の影響を否定するのは早計である。今回は被験者の自然な感情状態を利用したが、谷口(1995)にも述べられているように、自然な感情状態は非常に弱く、その効果が検出しづらい。そのため、感情特性の効果のみが認められた可能性がある。したがって、本研究の結果からは、強い感情状態におかれていない場合に、感情特性と認知は直接的に関連する、と結論づけるのが妥当であろう。

男女差については、大きく目立つ性差はなかったものの、感情特性、感情状態、感情解釈のそれぞれ、あるいはそれらの関連に、若干の性差が見られた。また、図版差については、どの感情特性とどの感情解釈との関連を検出しやすくに、図版によって違いが見られた。特に今回用いた図版は、否定的感情の解釈を導くような図版が多かったため、喜びなどの感情解釈は導かれにくかった。全体的な傾向として、喜びの特性と感情解釈との間に関連が認められなかったのは、このことが原因であるとも考えられる。図版については、さらに多くの被験者に施行したり、図版数を増やしたりするなどして、将来的には標準化の手続きを図ることが必要であろう。

最後に、本研究の臨床的示唆についても触れておきたい。本研究は非臨床群に焦点を当てたものとは言え、その結果は臨床的にも意義のあるものだといえるだろう。すなわち、特定の感情経験、特に否定的感情の経験が過剰であることは、感情の制御不全に結びつく。自分がどのような感情を経験することが多いのか、また、感情に関する情報処理にどのような偏りがあるのかを知り、その偏りを改善することは、感情の制御不全による苦痛を低減する上で助けとなると考えられる。今回得られた知見は、こうした情動の制御不全の問題の改善にも、応用できる可能性があるだろう。

#### 引用文献

- Beck, A.T. 1976 *Depression : Clinical, experimental and theoretical aspects*. New York : Hober.
- Bower, G.H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, **36**, 129—148.
- Broadbent, D.E., & Broadbent, M. 1988 Anxiety and attentional bias : State and trait. *Cognition and Emotion*, **2**, 165—184.
- Ekman, P. 1994 How are emotions distinguished from moods, temperament, and other related affective constructs? In P. Ekman & R.J. Davidson (Eds.) *The nature of emotion*. Oxford University Press. Pp.49—96.
- Eysenck, H.J., & Eysenck, M.W. 1985 *Personality and individual differences : A natural science approach*. New York : Plenum Press.
- Frijda, N.H. 1994 How are emotions distinguished from moods, temperament, and other related affective constructs? In P. Ekman & R. J. Davidson (Eds.) *The nature of emotion*. Oxford University Press. Pp.49—96.
- Izard, C.E. 1977 *Human emotions*. New York : Plenum Press.
- イザード C.E. 莊巖舜哉(監訳) 比較発達研究会(訳) 1996 感情心理学 ナカニシヤ出版 (Izard, C.E. 1991 *The psychology of emotions*. New York : Plenum Press.)
- Izard, C.E., Libero, D.Z., Putnam, P., & Haynes, O. M. 1993 Stability of emotion experiences and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847—860.
- Lazarus, R. 1994 How are emotions distinguished from moods, temperament, and other related affective constructs? In P. Ekman & R.J. Davidson (Eds.) *The nature of emotion*. Oxford University Press. Pp.49—96.
- MacLeod, C. 1990 Mood disorders and cognition. In M.W. Eysenck (Ed.) *Cognitive psychology : An international review*. John Wiley & Sons Ltd. Pp.9—56.
- MacLeod, C., & Mathews, A. 1988 Anxiety and the allocation of attention to threat. *Quarterly Journal of Experimental Psychology : Human Experimental Psychology*, **38**, 659—670.
- Magai, C. 1996 Personality theory : Birth, death, and transfiguration. In R.D. Kavanaugh, B. Zimmerberg, & S. Fein (Eds.) *Emotion : Interdisciplinary perspective*. Hillsdale, New Jersey : Laurence Erlbaum.
- Magai, C., & McFadden, S. 1995 *The role of emotion in social and personality development : History, theory, and research*. New York : Plenum.
- Malatesta, C.Z. 1990 The role of emotions in the

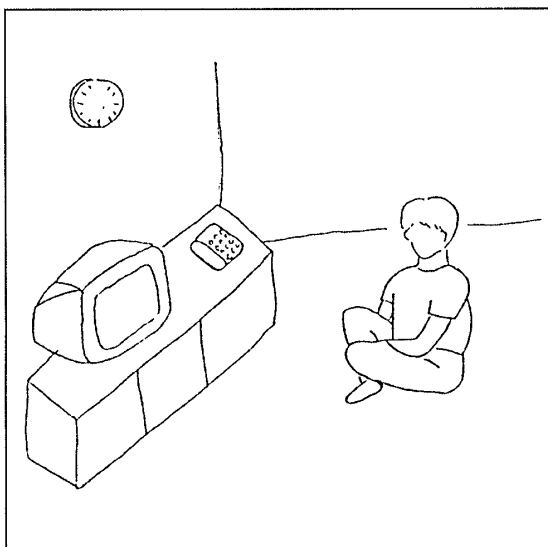


- development and organization of personality. In R.Thompson(Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation : Socioemotional development*. Pp. 1—56. Lincoln : University of Nebraska Press.
- Malatesta, C.Z., & Wilson, A. 1988 Emotion/cognition interaction in personality development : A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 91—112.
- Mathews, A., & MacLeod, C. 1985 Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 563—569.
- Mathews, A., & MacLeod, C. 1986 Discrimination of threat cues without awareness in anxiety states. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 131—138.
- Mogg, K., Mathews, A., & Weinman, J. 1989 Selective processing of threat cues in anxiety states : a replication. *Behaviour Research and Therapy*, **27**, 317—323.
- 谷口高士 1991 認知における気分一致効果と気分状態依存効果 心理学評論, **34**, 319—344.
- 谷口高士 1995 被験者の自然な気分の状態と性格形容詞語の再生成績との関連について 大阪学院大学人文自然論叢, **30**, 1—11.
- 高橋雅延 1996 記憶と感情の実験的研究の問題点 聖心女子大学論叢, **86**, 63—102.
- Tomkins, S.S. 1962 *Affect, imagery, consciousness : Vol.1. The positive affects*. New York : Springer.
- Tomkins, S.S. 1963 *Affect, imagery, consciousness : Vol.2. The negative affects*. New York : Springer.
- Watson, D., & Clark, L.A. 1994 How are emotions distinguished from moods, temperament, and other related affective constructs? In P. Ekman & R.J.Davidson(Eds.) *The nature of emotion*. Oxford University Press. Pp.49—96.
- Watts, F.N., McKenna, F.P., Sharrock, R., & Trezise, L. 1986. Colour naming of phobia-related words. *British Journal of Psychology*, **77**, 97—108.

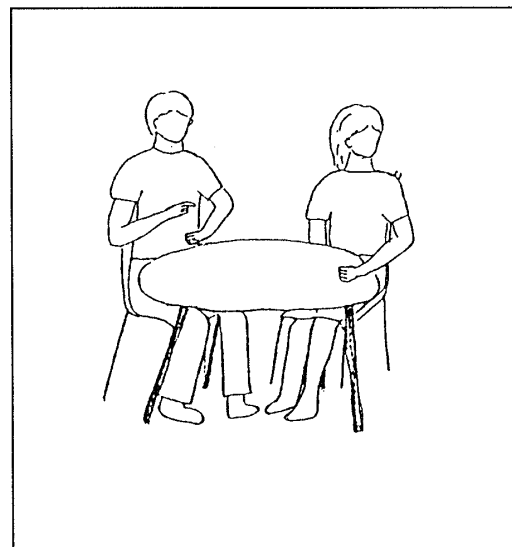
(1998.9.16 受稿, '99.4.26 受理)

## APPENDIX

図版 1



図版 2



*Individual Differences in Cognition of Affective  
Information : Affective Traits and Style of Interpreting  
Affective Content of Ambiguous Figures*

HIROKO SAKAGAMI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, THE UNIVERSITY OF TOKYO) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1999, 47, 411-420

The present study examined the association between personality characteristics and cognitive tendency, analyzing the variables of individuals' affective traits, affective states, and style of interpreting affective information in 169 university students. The affective traits were measured on 5 discrete affects (joy, interest, sadness, anger, and fear). The affective states were assessed just before the experiment on interpretation of ambiguous human figures. Then, the participants rated the affective condition of the figures. Results indicated that the students interpreted the figures' affective condition according to their own affective traits. They were more likely to project onto the figures what they themselves often felt. In regard to specific affects (sadness and anger, fear and sadness, fear and anger), the traits and the styles of interpreting affective information were related respectively. These associations could be found after removing the effect of the individuals' affective states. These results imply that specific affective traits may influence individuals' cognition styles in affective information, independent of affective states.

Key Words : affective traits, affective states, discrete affect, interpretations of affective information, university students